



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Monday 19 May 2003 (morning)
Lundi 19 mai 2003 (matin)
Lunes 19 de mayo de 2003 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の 1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。
(コメントリ―を書きなさい。)

1 (a)

病む父

雪が軒まで積り

日本海を渡つて来る吹雪が夜毎その上を狂ひまはる。

そこに埋れた家の暗い座敷で

父は衰へた鶏のやうに 切なく咳をする。

5 父よりも大きくなつた私と弟は

真赤なストオヴを囲んで

奥の父に耳を澄ましてゐる。

妹はそこに居て 父の足を揉んでゐるのだ。

寒い冬がいけないと 日向の春がいいと

10 私も弟も思つてゐる。

山歩きが好きで

小さな私と弟をつれて歩いた父

よく酔つて帰つては玄關で寝込んだ父

叱られたとき母のかけから見た父

15 父は何でも知り

何でも我意をとほす筈だつたではないか。

身体ばかりは伸びても 心の幼い兄弟が

人の中に出てする仕事を立派だと安心してゐたり

私たちの言ふ薬は

20 なせすぐ飲んでみたりするやうになつたのだらう。

弟よ父には黙つてゐるのだ。

心細かつたり 寂しかつたりしたら

みんな私に言へ。

これからは手さぐりで進まねばならないのだ。

25 水岸に佇む^もの葦のやうに
二人の心は まだ幼くて頼りないのだと
弟よ 病んでゐる父に知られてはいけない。

(伊藤整、『雪明りの路』一九五四)

(注) 伊藤整 (いとうせい) (一九〇五〜一九六九) 小説家、評論家。『日本文壇史』を書いた。

1 (b)

『月はどっちに出ている』(映画の脚本から)

首都高速・湾岸線(深夜) 忠男のタクシーが走る。

同・車の中 サラリーマンの男、身を乗り出して、

男 「(乗務員証を指して) あ、この字、知ってるよ、俺。生姜しょうがの姜。運転手さん、ガーさんつ
つうの?」

5 忠男 「……カンです。」

男 「中国の人?」

忠男 「……朝鮮人です。」

男 「在日韓国、朝鮮人つて言うのが、正式なんでしょう。」

忠男 「(曖昧に頷き) ……」

10 男 「俺の友達にも、在日韓国、朝鮮人がいっぱいいてさ。朝鮮ぶら……在日韓国、朝鮮人
がいっぱい住んでる所にてさ、名前なんだっけかなあ……」

忠男 「金さんじゃないですか」

男 「遠山のかつ(笑つて)。一度遊びに行つたのよ。りんご出されたんだけど、キムチの味し
てさ。何でもかんでもキムチくさくて」

15 忠男 「今も、お嫌いですか。」

男 「大好物。スーパーで輸入物の瓶詰買ってきちやうもの。俺、焼き肉、うるさいよお」

忠男 「……」

男 「でさ、婆ちやんがいて、ハングル語?ベラベラ話しかけてくんの。俺の友だち、うつむい
て、かわいそうだったなあ」

20 忠男 「日本に住んでんだから、日本語しゃべつてほしいですよね」

男 「ガーさんも、そう思う?」

忠男 「当然ですよ (省略)

男 「おれ、結構、韓国、朝鮮問題の記事に目通してんですよ。LAすごかったねえ。あいつら
バンバン、ピストル撃つちやうだもんね」

25 忠男 「恐いですよねえ」

男 「だけど、コリアンパワーつうの。是非、一度、ああいうの実感して見たいよな」

忠男 「私もですよ」

男 「おれ、ソウル、行つちやおうかな」

30 忠男 「私、ぜひ一緒にして、色々案内してもらいたいなあ」 一人、笑う。
 浦安・高層住宅街 忠男のタクシーが停まる。
 同・車の中 ドアが開く。サラリーマンの男、メーターをにらみ、
 男 「(笑顔で) あつちよつと足んないや、待っててくれる、ガーさん」
 忠男 「……」
 男 「(上階の灯りを指して) あそこだからさ。すぐ戻るから」
 35 忠男 「……」
 男、建物の中に入つて行く。忠男、車からおりて待つ。男、エレベーターのボタン押して、にっこり。
 同・中 男、忠男のスキをついて、一気に逃げ出す。忠男、追いかける。
 同・裏口 飛び出して行く男。追いかける忠男。
 市場 必死で駆ける男。必死で追いかける忠男。
 40 男 「来るな！つ。おまわりさん」
 男、半べそをかいている。忠男、行き止りに追いつめる。男、まわりのものをばんばん、
 忠男に投げつける。忠男、うまくかわしながら、男の前に立つ。脅えまくる男。
 男 「すみません、すみません。勘弁して下さい。殴らないで、ガーさん」
 忠男 「カんだ」
 45 男 「もう、しません、ガーさん」
 忠男 「カんだ」
 男 「もう、しません、ガーさん」 忠男、まわりの物をけ飛ばして、
 忠男 「カんだつつつつたらう」
 男 「(力なく) ……すみません、カンさん。」
 50 忠男 「金払え、金」 男、財布を取り出す。
 男 「シャレです……」
 忠男 「金だ」
 男 「ちよつとしたでき心です……」 忠男、金を抜き取り、ポケットからつり銭を出す。
 男 「……？」 忠男、つり銭と財布を渡して、
 55 忠男 「一、三九〇円のおつりです。どうもありがとうございました」 忠男、礼をして、去つて行く。

(注) (菅洋一・鄭義信、『月はどつちに出ている』、『93年鑑代表シナリオ集』、映人社、一九九三)

(注) 菅洋一(一九四九)映画監督、脚本家。二映画『プロハンター』で監督デビュー。監督作品に『いつか誰かが殺される』『女よ、静かに瞑する』『黒いドレスの女』などがある。鄭義信(一九五七)劇団黒いテントを経て、八七年「新宿梁山泊」結成に参加。上演戯曲に『千年の孤独』『人魚伝説』『ザ・寺山』などがある。